

ぴっかり　　ぴいすめいかあ

「じゃ、おさきー」

放課後のサッカー部の練習が終わってすぐ、あたしはシャワーでざっとからだを流して着替えると、ロッカーから飛び出した。

「なお、おつかれー。夕飯がんばってー」

シャワー待ちの子たちが、そう言いながら見送ってくれる。

みんな知ってるんだよね、あたしがたまに弟たちの夕ごはん作ってるの。だから一番にシャワーを使わせてくれるし、引き止めたりもしないでくれる。ほんと、恵まれてるよ、あたし。

でも、今日のあたしの行き先は、下駄箱じゃない。

「ま、これも家族のため、だよな」

部室をちよっとだけ振り返ってから、あたしは靴を持って図書室に急いだんだ。

「おーい、きたよー」

声をかけてしばらく待っても、あたりは静かなまんまだった。

「あれ？」

学校の図書室から本の通路を通って、いつものふしぎ図書館に着いて。でもだれの姿も見えないから、呼んでみたんだけど

見回したら、周りにあるたぐさんの本がこつちを見てる気がする。気のせい、なんだろうけどね。

でも気になり出すと、なんだか不気味だな。さっきのあたしの声だって、まるで本に吸われたみたいな感じだ　いやいや、気のせい、気のせい。

頭を振って嫌な感じを飛ばしてから、あたしは図書館の真ん中の、大きな木の切り株みたいな部屋に向かって歩き出した。

できるだけ、周りを見ないようにしながら。

3 ぴっかり ぴいすめいかあ

コン、コン

「入るよー」

切り株が凹くぼんだみたいなどころにあるドアを叩いても、返事が返ってこなくて。そのまま開けたんだけど、中はがらーんとしていた。

机もイスも測はかったみたいにきちんと並んで、まるで使われてない部屋みたいだ。

「おっかしいなあ。誰かいるー？」

練習終わってから行くから、先に始めといて、って言つといたはずなんだけどな？

まあ、今日の練習はサッカー部の方がバレー部より早く上がったから、あかねがないのはわかるけど。

「誰もいないのー？」

そう言えば、れいかも生徒会で遅くなるかも、とか言ってたっけ。だけど、

「みゆきちゃんも、しょうがないなあ。プリキュア

の今後の活動を考えようなんて言つといて、本人がいないんじゃないか」

ふう、って思わずため息ついちゃったよ。せつかくここに来る時間作ってるんだけどな。もう、家族のバッドエンドなんて見たくないから

って考えたところで、あたしは思い出した。あたしが部活に行くとき、先生につかまってたっけ、みゆきちゃん。こりや居残り、かな。

「ま、いいか。自分の部屋にはすぐ帰れるんだし、夕ごはん作る前に、ちよつと休んでこつ」

口に出しちゃった自分に思わず笑いながら、あたしはそのままイスに腰かけた。いつもみんながいるところにひとりだと、ついひとりごとと言っちゃうよね。

「ん？ ひとり？」

ひとり、忘れてる気がするな。ええと、あかね、れいか、みゆきちゃん、と

「ももあー」

なんか声が聞こえたと思ったその瞬間、あたしの全身に寒気が走った。

「ううわああああ〜っっ!!」

足の先から、なにか上がってくる。身体がどんどん鳥肌になってくのがわかる。

な、な、な、なに? なにが起きたの!?! 足のこれなにっっ!?!

「ふ、と、ももあ〜」

思わず立ち上がったあたしの足に、なにかくっついてた。たっぷりした明るい髪の毛の束 って!

「ちよ、な、なにやっつてんのよ、ばかっ!」

とっさに出てきた言葉はそれだけ。

だって、自分の目が信じられないよ。あたしの太股ふとももにぶら下がってるのが、やよいちゃんだなんて。

「ん〜 だめ?」

ダメ、ってなによ、ダメって。上目遣うやめじかいで見てるんじゃないわよっ!

「ダメに決まってるでしょ。ほら、離し」

あたしは両足バタつかせて引き剥はがそうとしたけど、

「だってだって、同じ運動部のあかねちゃんや、弓道やってるれいかちゃんとも違うんだよ、ふともも。」

ほじ

「うひやああっ!?!」

な、な、なでないで〜っ!! これじゃ剥はがせないじゃないのあっ!

「ふとももすき〜♡」

もう! そんな場所指定で好きになるなっ!

「ちよ、ちよと待って待ってっ!」

相手がやよいちゃんじゃ、そんなに乱暴もできないし、ああ、もうどうにかしてよっ!

「やっぱり、思った通りだよ。なおちゃんの、ぎゅーっ

と締まったふともも。あかねちゃんの、もちもちしたのもいいけど」

む。
なんだ。あたしだけじゃなくて、あかねにもしがみついているんじゃないの。

え？

なに考えてんだ、あたし。いや、違う違う。そういうんじゃないよ。

「でもね、他のひとの前だとへんに思われちゃう気がして」

いや、本人の前でも十分へんなんだけど

「それでもわたし、みゆきちゃんを見習うことにしたの！好きなものは、好き」

ああ、目が輝いちゃってる　ちよっと、かわいいかも。

って、違う！　あたしはそういうのじゃな

そういうのってどついうのよ！　違うっっ！！

「す、好きはいからちよっと、やよいちゃ　やよい！　とりあえず、は、な、れ、て~~~~っ！！」

はあ、はあ、はあ、　ふう。

なんとか、やよいを足から剥がせたけど、ひと息つくまでに10分はかかっていると思う。まったく、すっぱいから

しかも、やよいはそのまま床にちよこん、と正座して、こつち見上げてるし。なんか、まだ狙われている気分。

「机の下で、ずーっとあたしを待ってたわけ？」

「そっだよ。みゆきちゃんが居残りになっちゃったから、きつとわたしの次はなおちゃんだと思って。えへへ、なんかおっぱい屋敷みたいで、楽しかった♡」

えへへ、じゃないよ。まったく！

「で？　たださわりたかったから待ってたの？」

「うーん、ちょっと違うかな。みんなの絵を描きたくて。ふふ」

だから、ふふ、じゃないっての。やよいつて、みんな子だっけ？ 最近になって、印象変わったな

みんなが仲間になってから、かな？

「わたしね、スーパーヒーロー大好き♡ かつこいいもん。だからね、いまはみんなのプリキュアの姿を描いてるんだよ」

そう言いながら、やよいが背中からなにか出してきた。ああ、教室でもいつも持ってるスケッチブックだ。でもさ、

「プリキュアの絵だったら、キャンデイが持つてるプリキュアの絵本に描いてあったでしょ？ 別にやよいが描かなくなっちゃって」

そう言いかけたあたしの前に、ふくらんだ顔が迫ってきた。

「誰かが勝手に描いてる絵と、わたしが描く絵はちがつよお。なおちゃんだって、他の人が全部点とっ

てくれるって言われても、やっぱり自分でもシュートしたいでしょ？」

スケッチブックを胸に抱えて、あたしの目をじつと見上げてる。ああ。

「まあ、そう、ね」

点が取ればいい。いいんだけど、それとは別に、あたしも蹴りたい。まあ、同じ、か。

頭かきながらあたしが言うのを見て、ふくらんだ顔がにっこり笑った。

「わたし、ずっと見てたよ。あかねちゃんも、れいかちゃんも、なおちゃんも。みんなあんなにかっこいいんだもん。スーパーヒーローになったらどうなるかな、って想像もしてたし。本物見ていっばい描きたくなっちゃった。

でもね、なおちゃんはずーっと走りっぱなしだから、あんまりよく描けなくて。足がどんなかなーって、思ってたんだよ」

はあ

こりゃ、どうあっても折れそうにないか。まあ、ど
こかの美術部長みたいに爆発させるわけでもないし、
「見るだけなら、いいけど。ほら」

両足ほい、っと投げ出してあげたら、やよいが近
づいてじっと見てる。しょうがない、このくらいは
我慢するか。

それにしても、

「ヘンな友達できちゃったなあ」

しばらく、ぼーっとしたまんま、あたしは鉛筆の
音を聞いていた。

やよいの目がさつきから、あたしの足とスケッチ
ブックの間を行ったり来たりしてる。

たまに手が伸びてくると思わずびくつ、とするけ
ど、あたしの足を伸ばしたり、曲げたりしてポーズ
作ってるみたい。まるで人形だね、あたし。

座ってるだけのことないし、帰ろうかなって
思うんだけど そのたびに、やよいの顔を見ちゃっ
て動けなくなる。

描いてるときの顔が真剣なんだよね、やよい。こ
んな顔もするんだ 同じクラスだったのに、知ら
なかつたよ。

それにしても はあ、なにやってんだろ、あた

し。これなら、ふしぎ図書館に寄らないで、家で夕
ごはん作ればよかつたかな。

あたしには、家族が待つてるんだから

「あ、夕焼け」

やよいが頭を上げたのにつられて窓のほうを見た
ら、もう外が赤くなってきた。

「ヘンだよ。ここ、日本のどこでもないみたいなの
に、日本と時間が同じなの。れいかちゃん気づづ
いたんだよ」

「へえ」

やたら細かい、れいからしいな。時間が感覚でわ

「かるから、ありがたいこと、とか言ってるのかな？
あたしにはあんまり関係ないけど」

「れいかちゃんは何んでも気がつくし、なおちゃんもあかねちゃんもかっこいいし、みんな、すごいよね。プリキュアじゃなくても、スーパーヒーローだよ。わたしなんか、絵を描くだけだけ」

ん？

「みゆきちゃんは？」

「やよいの聲が、今までとちょっと違った気がして、あたしが思わず声をかけたら、」

「みゆきちゃんは、ウルトラハッピーだもん。かなわないよ」

「しょうがない、って顔で、やよいが笑ってる。」

「まあ、意味はわかるね。あれは確かにかなわないな、あたしたちじゃ」

「でもね、わたしもなれたから、楽しんじゃうことにしたの。スーパーヒーローごっこ」

「やよいが何を言ってるのかわかるのに、少し時間がかかった。」

「ごっこ　え？　えええっ!!」

「ごっこって、ちよつと、やよい!!」

「やよいの顔がずっと下に見える。あたし、いつの間にか立ち上がったんだ。」

「けど、そんなに構ってられない。だって、それは　っ!!」

「怒らないでよお、なおちゃあん」

「大きく開けた目に、だんだん涙がたまってくのを見て、あたしは止まらなかつた。だって、」

「泣きそつになつたつてダメだよ!!　ごっこじゃ済まないんだから。いまは　勝ってるけどさ」

「だってあたしの頭には、あたしが初めてプリキュアになったときの景色が映ってたから。みんなが、家族が地面にへたり込んで、絶望している姿　!!」

「あたしだって、ちよつとは考えるんだ。いままで勝ってたのって、ただの偶然かも、とかさ!!」

だからぶざけた考えじゃダメだよ！やるなら真剣に」

「真剣に、楽しんじゃ、だめ？」

「こぶしを握って、思い切り出そうとした次の言葉が、やよいの目で止められた。

涙はたまってるけど、下からあたしを、真っ直ぐ突き刺すような目。

「わたしも怖いよ。最初から怖くて怖くて たまたま負けなかったなって、変身するたんびに思ってる。でもね、なにしたらって怖いんなら、楽しんじゃった方がいいよ」

真剣に、楽しむ でも、

「それで、もし、ピンチに、なったりしたら」

「そしたら、なおちゃんは助けてくれるでしょ？」
うっ

なに、このぴっかり輝くみたいな笑顔!?

こんなに押し強かったっけ、やよいつて。なんか、

変わった？

「わたしを助けるの、なおちゃんの兄弟のあとでもいいよ。わたし、ちゃんと待ってるから。

それに、わたしも助けるよ。なおちゃんも、なおちゃんの兄弟も。怖くても、楽しく、ね？」

たまった涙をまばたきで散らして、やよいがまた、ぴっかり笑った。

はあ

あたしの兄弟も、楽しく、か。

「そっか。やよいに、それ以上求めちゃいけないよね」

自分で言っていて、納得した。

変わったわけじゃない。やよいはもとからこっだったんだ。

「ぶうー！そういう言い方きらいだよ？」

ほっぺたふくらませた顔が、夕焼けに染まって輝いてるよ。

引っ込み思案で、いつもひとりに見えるけど、み

んなを、あたしのこともちゃんと見ていて、世話焼きで

「ピース、かぁ」

平和、って意味だったよね。その通りだよ。

あたしたちがいままで見ていなかっただけで、本当にひとのために笑える子、だったんだね。

「うん わたしの名前、ピースでよかった。スーパーヒーローだもん、みんな助けて、楽しく平和を作らなきゃ。びいすめいかぁだよ」

両手を開いたやよいの顔が、近づいてきた。

いや、気が付かないうちに、あたしが座ったのか。

「ピースメーカー？」

なんとなく、やよいらしくない名前に思えて、あたしが聞いてみたら、

「ううん。びい、す、めい、かぁ」

人差し指たてて、ひとつづつ区切って言い直した。ん、と。

「同じじゃないの？」

「違うよぉ。ちよっと、違うんだもん♡」

まただよ。びっくりした笑顔。友達になるまでは、見れなかった顔。

「びっくりな、ピースメーカー ふうふう」

なんか、かわいいな。 って、え？

びっくりな笑顔の端っこが、ちよっとだけ別の笑顔に変わった。これ、見覚えあるよ。たしか、弟たちがイタズラするときの！

気づいてすぐ立ち上がろうとしたけど、あたしの方が一歩、遅かった。

「よいしょおっつ！」

やよいの顔が見えなくなったと同時に、あたしの足が両方いつぺんに、ぎゅっとしばられて したがみついてるうっ!?

「それじゃ、つづきつづき。今度はもちよっと、ふとももの上のほう」

ふくらはぎからよじ登ってくるやよいの顔が、またびっくり輝いた。

11 ぴっかり ぴいすめいかあ

かわいい、けど、だけどあ〜っ！

「た、楽しくてもいいから、だから
じるのやめて〜っ!!」

あたしをい

—おしまい—